美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

1

2014 January/February

TAKE FREE

NO.21

特集

庄内を味わう温泉旅

庄内憧憬

妹尾堅一郎

産学連携推進機構理事長

Cradle 1

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2014 January/February

平成26年1月1日発行（偶月奇数月発行）第4巻3号（通巻21号）

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部 山形県酒田市亀田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

酒田市／鳥海山と白鳥

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

荘内銀行

すべて揃って按配よし

妹尾 堅一郎

雷文化都市・鶴岡に惹かれて幾星霜
自然、産業、観光、人材など、すべてが揃う東北の街で
今年も「雷サミット」が開催される

「すべて揃って、按配よし」

英語で言えば「フルセット、ウエルバランス」。鶴岡の私設応援団を自称する私にとって、鶴岡の素晴らしさはそこにつきる。

海あり、山あり、川あり、そして何より庄内平野が広がる。合併で東北一の面積を誇る鶴岡市は、農林水産業も、工業も、観光を中心にしたサービス業も、すべてが揃っている。人材も多彩だ。文学で言えば、文化勲章・芥川賞の丸谷才一から直木賞の藤沢周平や佐藤賢一に至るまで幅広く揃う。

さて、そもそも私が鶴岡市に初めて訪れたのは1999年。慶應義塾大学の産学連携・学術事業・社会人教育等の新プロジェクトを担当する本部付き教授として、鶴岡市に開設する慶應義塾大学の鶴岡タウンキャンパス（TTCK）「先端生命科学研究所」の設立準備を行っていた頃だった。設立にあたっては、山形県や鶴岡市、周辺の市町村に大変お世話になっていた。

そこで御礼の意味も込め、地域づくり・街おこしをお手伝いしようと、市役所や市民活動のリーダーの方々と毎月のように会合を持ち、いくつものプロジェクトを立ち上げたのである。その一つが今も続く「雷サミット」だ。

世界でも稀な冬季雷が発生する庄内地方。その特徴を活かし、鶴岡市が提唱する「学術文化都市」形成の一助として、市民の方々に学習の場と機会を提供しようと、雷サミットの第1回が2002年の3月に開催された。

雷発生の科学、防雷対策技術などの話にとどまらず、雷にまつわる文化・芸術論や、社会の雷害リスク低減施策に関する社会研究まで、さまざまな側面からアプローチした。この分野では初の学際的な会合、しかもそれを産学官公民の協力で行う試み、さらに市民の多くが参画する学習の場を提供するイベント…。幸いにも初回は大好評で、以後、富塚陽一前市長や榎本政規現市長の変わらぬご支援の下、毎年開催されるようになった。日本を代表する自然科学系研究者による「雷科学論」、あるいは人文系研究者による「雷文化論」など、多様な「知」の交流が行われる本サミット。2007年には著書『雷文化論』が、慶應義塾大学出版会から出版されている。

最近は「雷俳句・川柳コンテスト」や「雷写真コンテスト（音羽電機工業㈱提供）」、本サミットを契機として生まれた防雷企業の団体「雷害リスク低減コンソーシアム」の報告など、サミットは一層賑やかになっている。毎回趣向を凝らしたお弁当「雷ランチ」も楽しいものだ。次の開催は2014年1月18日（土）。おかげさまで第13回を迎える雷サミットは、多くの方々のご参加をお待ちしている。

※1月18日の「雷サミット」詳細は40ページへ。

第10回雷写真コンテスト 学術賞「T字落雷」2010年12月撮影（福井県福井市）
撮影者：吉岡敏夫様（福井県在住）／音羽電機工業株式会社 雷写真コンテスト提供

せのお・けんいちろう／特定非営利活動法人 産学連携推進機構 理事長。1953年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、英国国立ランカスター大学経営大学院博士課程満期退学。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授、東京大学先端科学技術研究センター特任教授などを歴任。現在は一橋大学大学院、九州大学、放送大学の客員教授を兼務。農林水産省技術会議委員。前内閣知財戦略本部専門調査会長。専門はビジネスモデル論、知財マネジメント、問題学・構想学。

特集

庄内を味わう温泉旅

心と体を癒やす、美肌に良いなど
さまざまな恵みがあるといわれる温泉。
温泉をめぐる旅は、その土地を味わう
ひとときでもあります。海と山と川に
恵まれた庄内温泉旅の魅力を、その道の
スペシャリストとひも解いてみました。

湯野浜温泉 游水亭いさごやの「吟水湯」展望檜風呂

日本海に沈む夕陽をひとり占めできるかのような時間を過ごせる檜風呂。
同宿では他にも趣の異なる5つのお風呂が楽しめる。

鶴岡市湯野浜1-8-7 TEL.0235-75-2211

〈参考文献〉
石井宏子著『だから行きたくなる温泉セラピーの宿50』集英社、
『癒されてきれいになるおひとりさま温泉』朝日新聞出版、
『地球のチカラをチャージ！ 海温泉・山温泉・花温泉』マガジンハウス
石井宏子オフィシャルサイト http://www.onsenbeauty.com/

〈協力〉
日本海きらきら羽越観光圏推進協議会、株式会社ニュートン、出羽三山神社、
湯田川温泉協会、湯野浜温泉観光協会、あつみ観光協会

特集 庄内を味わう温泉旅

地球の力にふれる温泉旅

温泉ビューティ研究家が語る、庄内の温泉旅

1

2

3

4

5

温泉は地球がくれた天然のビューティツール

すべての市町村に温泉がある温泉王国、山形県。庄内には海沿いや山麓に、歴史ある温泉郷があります。「美人の湯といわれるところは全国にありますが、庄内もそのタイプが多いですね」と話すのは、昨秋、「日本海きらきら羽越観光圏」の講演に招かれ、湯田川温泉、湯野浜温泉、由良温泉、あつみ温泉を訪れた石井宏子さん。

温泉の美容力を研究する日本でただ一人の温泉ビューティ研究家です。石井さんに、温泉の力や庄内の魅力をお聞きしました。

昔から健康や美肌に良いといわれてきた温泉ですが、期待できる効果は泉質によって異なります。庄内の温泉は、ほとんどが保湿タイプの硫酸塩泉と塩化物泉で、美肌の湯の代表格です。他にも炭酸水素塩泉やアルカリ性の泉質はクレンジング作用、硫黄泉や二酸化炭素泉はデトックス作用、単純温泉はリラックス作用など、目的に合わせて泉質を選べば、美と健康への力はより高まるそう。「温泉は、生きている地球から生まれた、生きている水です。その水が地中から上がってくる時、通り道にある地層のさまざまなミネラルを含んで出てきます。だから温泉は世界に二つと同じものがありません。ひとつの成分が多い温泉もあれば、いろんな成分が均等に含まれている温泉もあったりと、成分バランスがそれぞれに異なるのです」。

〝温泉は地球がくれた、天然のビューティツール〟と提唱する石井さんは、温泉は地球の水との一期一会であり、身ひとつで地球と対話する場だとも語ります。「以前、湯殿山神社の参籠所で御神湯に入ったら、あんなに山の上なのに塩が濃くて鉄分や二酸化炭素ガスも入っていて、全身の細胞が目覚めていく感覚を覚えました。地球のパワーそのもののような、本当に濃厚なお湯でしたね」。

地球の恵みは温泉だけでなく、食や自然環境などにも行き渡ります。そのため旅の醍醐味は、一つ一つ異なる温泉との出会いのように、訪れた場所ごとに違う土地のエネルギーをいただくこと。数年前にプライベートで庄内に来て以来、何度かこの地を訪れている石井さんに庄内の魅力をお聞きしました。「一番は食ですね。庄内には力のある食材が豊富にあります。食材はもともと、その土地の土と空気と風と太陽と水に育まれたものですから、それだけで土地のエネルギーをすべて持っているんです」。何年か前、羽黒山の山懐にある筍沢温泉を訪れた石井さん。温泉はもちろん、お料理の美味しさに驚いて、食の力でも心と体が元気になると思ったとか。

大地と海のエネルギーをいただく庄内の温泉旅

「自然環境もそうです。山の上に温泉が湧いていたり、川沿いを散策できたり、海がすぐ傍にあったりと、庄内には素晴らしい場所がたくさんあります。そんな恵まれた地にある温泉で、普段オーバーヒートしがちな心と体をスイッチオフして、土地のものを食べ、山や海のパワーをもらう。それらすべてが心と体を癒やし、美と健康をつくる源になるのです」。

土地のエネルギーで心と体をキレイにする。庄内を満喫する新しい旅のトビラが今、開きました。

6

石井宏子さん
温泉ビューティ研究家

温泉の美容力を研究する中で温泉地の自然環境にも着目し、ドイツで「気候療法士」を修了。トラベルジャーナリストとしても年200日ほど温泉地を訪ね、取材執筆や講演活動を行っている。

1〜3.湯殿山参籠所丹生鉱泉御神湯（鶴岡市田麦俣 TEL.0235-54-6133 ※11月上旬〜4月上旬閉山）4.5.筍沢温泉（鶴岡市添川 TEL.0234-59-2244）6.湯野浜温泉 亀や「羽衣の湯」にて。

ぬくもりの名泉 古里の湯治場

湯田川温泉

人々に愛され続けるレトロな湯治場 歴史ある湯と人とのふれあいに出会う町

鶴岡市の中心部から南西へ車で約15分、金峯山の麓に位置する閑静な湯田川地区。鶴岡の奥座敷とも称され、木造瓦屋根の旅館が軒を連ねる町並みからは、懐かしい日本の古里風情が感じられます。

開湯1300年を迎えた湯田川温泉は、712（和銅5）年、一羽の白鷺が葦原に降り立ち、湧き出ていたお湯で傷を癒やしたことが始まりとされています。以来、古くは庄内藩主が好み、出羽三山の参詣者の精進落としの人々で賑わい、明治以降は竹久夢二や横光利一、種田山頭火、藤沢周平などの文人墨客がたびたび逗留した温泉地として知られています。

毎分1000ℓの豊富な湯量と全国屈指の新湯注入率を誇るその泉質は、ナトリウム・カルシウム―硫酸塩泉。湯上がり後も冷めにくく、お湯に含まれる芒硝（ぼうしょう）の成分が肌に潤いを与えます。源泉温度は熱すぎず、ゆっくり浸かることができる43度。源泉のすぐ傍には共同浴場「正面湯」があります。

「湯田川温泉の一番の魅力は、風情ある二つの共同浴場ですね。どちらも鍵をお借りして入るというシステムなので、地元の方々が大切にしてきた歴史あるお湯にゆったりと包まれながら、地域の皆さんとふれあうことができます」と石井宏子さん。

正面湯を通り過ぎて小路を入ると、静かな佇まいの宿が目に入ります。石井さんが今回泊まった九兵衛旅館です。創業は300年以上前、11代目を担う大滝研一郎さんは「日本の温泉文化は、温泉の効能はもちろん、お料理やおもてなしがあってこそのもの。お客さまがいつ訪れても、心からご満足いただける旅館でありたいですね」と、メゾネットの客室や食事処、露天風呂を新設するなど、改良努力を惜しみません。「湯田川は山海と田畑の幸に恵まれ、四季を通じて食材のバリエーションが豊か。冬には脂ののった寒鱈を余すことなく堪能できる『寒鱈の膳』、春なら朝採りの湯田川孟宗をいただく『孟宗の膳』など、旬の時期に一番美味しく味わっていただくお料理を、1ヵ月半ごとに変えてご提供しています」。

九兵衛旅館のみならず、料理自慢が多い湯田川温泉。庄内伝統の味を伝えようと女将自らが腕を振るう「おかみ乃おへぎ」、湯田川の町をまるごと博物館に見立てる「庄内朝ミュージアム」など、歴史ある温泉郷の絆は今、町の新たな魅力を生み出しています。潤沢なお湯に、滋味深い郷土料理。湯田川温泉は、山里の恵みに温泉を守り続けてきた人々の思いが相まって、体も心も優しく癒やしてくれそうです。

文＝土門かおり

写真は九兵衛旅館の「初冬の膳」。1月中旬には「初春の膳」が登場。腹8分目プランも人気。

全体的に小規模な宿が多い湯田川温泉はコンパクトなサイズで、散策にぴったり。共同浴場はメイン通りにある「正面湯」と九兵衛旅館隣にある「田の湯」の二つ。石井さんは宿泊した九兵衛旅館で、大きな水槽の中を泳ぐ金魚を眺めながら入る「川の湯」に驚いたそう。九兵衛自慢の料理は、地物食材を用いたベーシックな調理法に、大人の遊び心を加えた創作懐石。新鮮さや温度など、おいしさのタイミングを大切にした「瞬間料理」が特長です。

特集 庄内を味わう温泉旅

石井宏子さんと訪れた宿

湯田川温泉 九兵衛旅館
鶴岡市湯田川乙19 TEL.0235-35-2777

江戸時代創業の老舗でありながら、時代のニーズに合わせた清潔感あふれる個性的なしつらえで、郷土食をベースにした季節ごとの創作懐石が好評。姉妹館「珠玉や」の無料貸し切り風呂も利用でき、好評。

潮音、波風、白砂 海への展望湯

湯野浜温泉

海を眺め、味わい、包まれる スパ&タラソテラピーの湯どころへ

日本海に面し、北に霊峰鳥海山と白砂青松の海岸線、南には奇岩の磯をのぞむ湯野浜温泉。夕暮れの沈みゆく太陽が美しく、日本の夕陽百選にも選ばれています。

開湯の歴史は、千年ほど前にさかのぼります。天喜年間（1053〜58年）に、漁夫が海辺で温浴している亀を見て温泉を発見したという故事が残るため、かつては〝亀の湯〟と呼ばれていました。近代に入ると奥州三楽郷の一つとして栄え、現在では日本海のリゾート地として、多くの来訪者を魅了しています。

「この地域の大きな魅力は、海の恵み。海水には海洋性ミネラルという、130種類以上の特別なミネラルが含まれていて、生き物に欠かせない成分がたくさん入っているんです」と石井宏子さん。海からの潮風が吹く午後から夕方にかけては、陸地に海のミネラルが運ばれてくる時間。お昼頃から海が見える場所を散策するだけで「タラソテラピー（海洋療法）」になり、リラックスにつながるのだそうです。また、湯野浜の泉質は体の芯まで温まる塩化物泉。冷えを防いで血のめぐりを良くする、冬におすすめのお湯とのこと。

そんな湯野浜エリアで、石井さんが宿泊したのは旅館「亀や」の最上階フロア「HOURAI（ほうらい）」です。

2012年に誕生したこの空間は各部屋に温泉が設けられ、インテリアから料理、アメニティグッズに至るまで、すべてが特別仕様。宿泊者専用にバーラウンジも備えられ、チェックインからお帰りまでをこのフロアで過ごすことができます。

「HOURAI」を設けた経緯について、社長の阿部公和さんは「今はサービスとして求めるものが個人個人で異なる時代。飛行機のファーストクラスのような、より上質を求める方のための『亀やのトップオブトップ』を創りたかった」と語ります。設計は東北芸術工科大学との協同プロジェクトとして、全6室のうち1室を芸工大の学生たちが担当しました。「芸工大で教鞭を執る馬場正尊さん（Open A代表）とご縁ができて。学生の実践力を養う場として、うちを提供したんです」。Cloud Roomと名付けられた白を基調とした曲線的な空間は、まるで雲の中にいるような夢見心地へと誘います。また、石井さんが「日本でも屈指のクオリティ」と太鼓判を押すお料理も、アワビや藤沢かぶなど庄内の山海の旬を凝縮したコースで楽しむことができます。

海の力で五感が満たされ、心も体も自然体になれる。それが湯野浜温泉の最大の効用です。

文＝松本典子

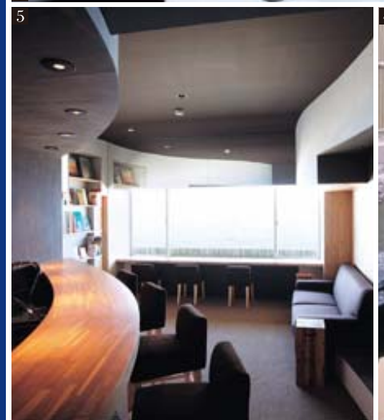
石井宏子さんと訪ねた宿

湯野浜温泉 亀や
鶴岡市湯野浜1-5-50 TEL.0235-75-2301

文化10年（1813）創業。全客室から海が一望でき、1人旅から団体まで多様な滞在スタイルに対応。石井さんいわく「老舗大型旅館の楽しさとデザイナーズ温泉宿を併せ持つ“わざわざ訪れたい空間”」。

弧を描く水平線を眺め 潮風を感じて過ごす 美観と美肌の湯。

芸工大との産学協同プロジェクトにより誕生した特別室「HOURAI」は、海への開放感が時間を演出。



1.2「HOURAI」の2名室。壁一面に施された名栗（なぐり）の技が、陰影の面白さと奥ゆきを感じさせる。食事は畳の上でも、景色を眺めながらでも。 3.石井さんが絶賛する亀やの料理。丁寧に出汁を引き、素材感を出した庄内の旬づくし。「HOURAI」フロアの宿泊客は、お部屋での食事となる。4.全館共用の女性用「羽衣の湯」。湯に含まれる塩分が温もりをコーティング。5.「HOURAI」専用ラウンジ。6.レジャーや観光の拠点として多くの人が訪れる湯野浜温泉街。2ヵ所の共同浴場がある。

川音に包まれる湯浴み街道

あつみ温泉

東に温海岳、西に日本海を有するあつみ温泉は、およそ1300年前に開湯しました。温海川を挟んで左右に大型旅館や木造3階建ての老舗旅館などが並び、歴史ある温泉街の趣が漂っています。

春には桜並木が河畔を淡く彩り、初夏には高台の「あつみ温泉ばら園」で約90種3000本のバラが次々と咲き、春から秋にかけては260年以上前から続く朝市に、色とりどりの浴衣を身につけた宿泊客たちが集う、清流沿いの湯の町。近年は「そぞろ歩きの楽しいまち」をテーマに大規模な整備が行われ、休日になると温泉街を散策したり、川辺の足湯でくつろいだり、足湯カフェ「チットモッシェ」でランチや足湯を楽しんだりする人たちが、多く見受けられるようになりました。

そんなあつみ温泉を代表する宿の一つが、創業300余年の老舗旅館「萬国屋」です。「楽山楽水」をコンセプトに据えた宿は、「プロが選ぶ日本のホテル・旅館100選」にて34年連続受賞、今年は総合ベスト8位に選ばれるなど、まさに東北を代表する温泉宿。館内のいたるところに季節の花が飾られ、目と舌で楽しむ料理の数々など、どれをみても高いホスピタリティが伝わってきます。

大浴場「桃源山水」と庭園露天風呂「桃里の湯」は源泉掛け流しの温泉。昨春、更衣室に広い「お休み処」が新設された。

やわらかなお湯に身をゆだねて、日頃の自分を解放させる山川の宿

特産の赤カブや海産物などが並ぶ「朝市」は4〜11月に毎日開催。温泉街には足湯と共同浴場、飲泉所が設けられている。萬国屋の客室は、純和風の「本館」、和風モダンな「中央館」、露天風呂付き「離れ」に加え、ワンランク上の部屋も各種用意。3階の大浴場「楽水」は萬国屋自慢の広大さ。食事はダイニングか個室のほか「部屋食プラン」も。料理は山形の四季が感じられる懐石料理で、秘伝のタレを使った伝統料理「鯛のかぶと煮」は変わらぬ味。

川のせせらぎに耳を傾けてスイッチオフ ゆっくりと自分時間が流れる清流の里

今回の取材で大浴場「桃源山水」に入った石井宏子さんは、萬国屋の温泉について話します。

「源泉の温度が高い場合、一般的に大きな浴槽で源泉掛け流しをするのは難しいのですが、萬国屋さんでは、源泉温度を下げる努力をしながら大きな源泉浴槽をきちんと設けているんです。お湯へのこだわりを感じて感動しましたね」。

あつみ温泉の源泉は毎分1300ℓの湧出量で、温度68度。泉質は、体を温める塩化物泉と、保湿タイプの硫酸塩泉が含まれたナトリウム・カルシウム―塩化物・硫酸塩泉で、お肌の乾燥や冷えに良いといわれています。

萬国屋では、この源泉掛け流し温泉以外にも、3階の大浴場「楽山」「楽水」を昨春から時間による男女入れ替わり制に変更し、誰もが三つの大浴場に入れるようにしました。「野趣あふれる露天風呂、寝湯、シルクバス、広々とした大浴場などさまざまな温泉があるので、お客さまから館内で湯めぐりができると喜ばれています」と営業部の佐藤加奈子さん。

清流のせせらぎを聞きながら街を散策し、季節ごとに色彩を変える景色を眺め、足湯でカフェタイム。そして自然に抱かれたお風呂で自分を解放させたら、山海の味覚に舌鼓。あつみ温泉は、そんな自分へのご褒美のような時が過ごせる湯の町です。

文＝鞍貫明子

石井宏子さんと訪ねた宿

あつみ温泉 萬国屋

鶴岡市湯温海丁1 TEL.0235-43-3333

総客室133室、760名収容というあつみ温泉最大の純和風旅館。コンセプトは温海川と山を楽しむ「楽山楽水」。宿のしつらえや海山川の幸を使った料理など、すべてが東北トップクラスの風格。

庄内写真季行 16 庄内町・立谷沢

雪で遊び、目で楽しむ。地域みんなで作る夜のかまくら 立谷沢の雪舞台。

蝋燭の灯りに浮かびあがる夜のかまくら。「お母さん、あったかいね」。聞こえてくる声から、冬を楽しむ親子の情景が思い浮かぶ。北月山の麓、庄内町立谷沢。北月山荘周辺に積もる雪は4mを越える。そこで始まった巨大なかまくらづくりに、雪で遊び、目で楽しむスノーアートフェスティバルも加わった昨今、たくさんの人が真冬の魅力をここで発見している。地域みんなでつくる、大自然と触れ合う場。これが立谷沢スタイル、冬の「雪舞台」。

写真・文＝兼古哲也

宅の店の歌舞伎くるみ

そのネーミングとくるみの風味
そして歌舞伎の絵が描かれたパッケージなど
一度食べると忘れがたいこの和菓子は
酒田で愛されてきた、ふるさとの味

黄金色のカケラが散りばめられた乳白色の物体。これは昭和63年から東京銀座の歌舞伎座でも販売されている宅の店の「歌舞伎くるみ」。材料は砂糖とクルミと寒天のみで、寒氷（かんごおり）ならではのホロッと溶ける口あたり、そしてクラッシュされた焼きクルミの香ばしさと歯ごたえが、お茶はもちろんブラック珈琲にもマッチする味わいだ。

誕生のきっかけは、初代の伊藤幸治郎氏が酒田市黒森に伝わる黒森歌舞伎を観たことだった。県の無形民俗文化財に指定され、斉藤茂吉文化賞も受賞したこの伝統芸能は、日枝神社の旧暦小正月行事として270年以上も受け継がれている農民歌舞伎だ。厳冬期の2月に神社境内にある屋外の演舞場で奉納上演されるため「雪中芝居」とも呼ばれ、古い形式が残されていること、全国各地の地芝居の中でも屈指のスケールを誇ることなど、毎年多くの人が雪の中の上演を心待ちにしている。

店のしおりに「黒森歌舞伎が（略）雪深いこの地方の農民の生活の中に、太く逞しく生きているということは大きな驚き」と綴った初代がこの歌舞伎に出会ったのは、戦後、酒田でお店を開いて間もない頃だった。戦前は宮内省で和菓子職人として働き、戦中は全国を転々としながら海を渡り、大連へ。戦後はロシアで捕虜生活を送るなど、流転生活を経て生まれ故郷に戻った初代にとって、雪の上のむしろに座り、ふるさとの人たちとお神酒や自前の重箱をつつきあいながら観た歌舞伎は、どれほど感慨深かったことか。この寒氷は、その時の、ぼた雪がキラキラと光を反射させながら舞い降りる景色そのものなのだろう。

「お宅の店だからどうぞご利用ください」という意味の「宅の店」は、昭和20年代後半に酒田台町で開店。現在は3代目となり、酒田市駅東で営業。歌舞伎くるみの取り扱い先は東京歌舞伎座のほか、酒田夢の倶楽、清川屋など。鶴岡まちなかキネマでも元旦から2月のシネマ歌舞伎上映に合わせて販売。黒森歌舞伎については酒田市教育委員会へ（☎0234-24-2994）

宅の店　☎0234-24-5700

庄内俳句紀行

雪しまく庄内を歩く

鉛色の空の下、電線が冬空を大きく切るように揺れる。
どこからともなく聞こえる虎落笛（もがりぶえ）。
雪しまく一面の雪原は、田んぼと道路の境目すらわからなくする。
時折気まぐれのように、ぽっかりと空に青空の落とし穴ができる。
こんな落とし穴なら落ちてみたい、と青空に思いを馳せる。

俵雪（鶴岡市京田）

行人や吹雪に消されそれつきり

―松本たかし

庄内の冬は、寒に入るとさらにその厳しさを増す。立春、暦の上では春でも、庄内はまだ冬の真っ只中にある。

風雪で視界が1キロ以下になる現象を「吹雪」というが、地に積もった粉雪が強い風で舞い飛ぶ様を「地吹雪」という。一寸先も見えなくする地吹雪は、前を走る車の姿を消し、その場から一歩も動けなくしてしまう。そんな日はじっと家に篭るしかない。雪国の人が辛抱強いのは、この冬を幾度も過ごし、向き合い、受け止めてきたからだろうと思う。

その強烈な様相とは裏腹に、不思議で愛らしい雪景色もある。田んぼなどの雪原で見られる「俵雪」だ。別名「雪まくり」ともいわれるこの現象は、硬い雪の上に降った新雪がしまり雪となった頃、風でまくり上げられ、まるで海苔巻きのようにころころと回転して俵型をつくる。

地吹雪

地吹雪が起こる前後に見られる俵雪は、豊作の吉兆。厳しさと豊かさを与えてくれる自然の造形美を、俵雪に見るようだ。

風やみて突如あらはる俵雪

―あべ小萩

庄内には、毎冬の行事がいくつかある。その一つが、江戸時代享保年間から270年余続く「黒森歌舞伎」。毎年2月15、17日に、黒森日枝神社に奉納される「雪中芝居」で、農民歌舞伎として地元住民が受け継いできた。当日は神事に始まり、本狂言の前に地元小学校児童による少年太鼓と少年歌舞伎が上演される。普段は閑かな境内も、幕が開けば一転、きらびやかな衣装と役者の華に彩られる。一座は「妻堂連中」と呼ばれる伝承組織。郷土芸能が健やかに伝承されていることに感動を覚える。観客は雪の中、熱燗を手に弁当を食べ鑑賞する。これこそ雪国ならではの楽しみであろう。黒森歌舞伎は、県の無形民俗文化財に指定されている。

目のうらに黒森歌舞伎あられ雪

―あべ小萩

最上川河口にある山居倉庫は、酒田米穀取引所の付属倉庫として建造され、築百年以上を経た今も、農業倉庫として活躍する。漆黒の壁と欅並木の美しい対照は1年中楽しむことができるが、冬は墨絵の世界となり、ことさら風情がある。

雪国に子を生んでこの深いまなざし

―森澄雄

日本海へ出ると、そこは冬怒濤。寒い日には一面に波の花が舞う。寒さと共に美味しさを増す海の恵をご存じだろうか。冷たい荒波がつくる滋味、岩のりである。岩のり摘みは女性の仕事。波しぶきが上がる岩場で、のりを指に絡めては摘んでいく。厳を打つ荒々しい波とは対称的に、黙々とした女性たちの強さを感じた。

この極寒の冬があるからこそ、雪解けのあたたかな匂いや、芽吹きの時が待ち遠しい。立春を過ぎる頃、訪れる春への思いを胸に、小さな春探しが始まる。

写真・文＝俵谷敦子（あべ小萩）（月刊俳誌「月の匣（はこ）」同人）
写真提供（俵雪）＝植松芳平（鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」館長）

黒森歌舞伎

山居倉庫